

年号：1982 年

月日：7 月～8 月

災害名：昭和 57 年 7 月豪雨と台風第 10 号〔長崎大水害〕の概要

本明川位置図



出典：国土地理院

【昭和 57 年 7 月長崎大水害の概要】

- ・前線の北上に伴い、本明川流域では 23 日の夕方より降雨が始まり、夫婦木では、23 日 20～21 時の 1 時間雨量 114mm、同日 17 時～日 17 時までの 24 時間雨量が 472 mm という記録的な雨量となった。
- ・裏山地点では、HWL まで 0.61m の高さまで上昇し、一部堤防の低い箇所からの溢水が生じた。

▼昭和 57 年 7 月長崎大水害による本明川流域の被災状況

死者	3 名
家屋の全半壊戸数	13 戸
浸水家屋	2,408 戸

出典：本明川水系河川整備計画（変更）（平成 28 年 3 月）

[国土交通省 九州地方整備局 長崎河川国道事務所]

1. 過去の被害情報(昭和57年)



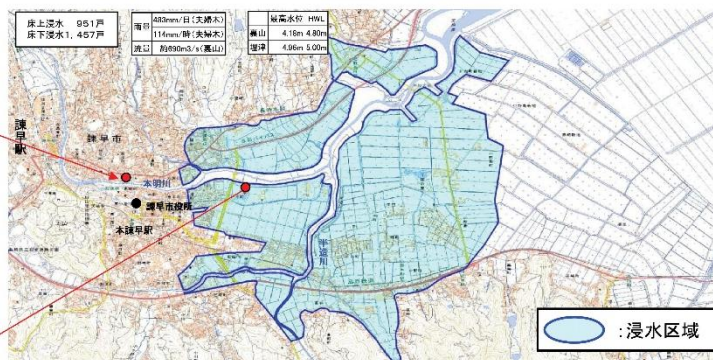
- ◆前線の北上に伴い、本明川流域では23日の夕方より降雨が始まり、夫婦木では、23日20～21時の1時間雨量114mm、同日17時～24日17時までの24時間雨量が472mmという記録的な雨量となった。
- ◆裏山地点では、HWLまで0.61mの高さまで上昇し、一部堤防の低い箇所からの溢水が生じた。



諫早市街地(高城橋付近)



諫早市仲沖地区溢水による川裏崩壊



福岡川の水防活動



Ok800付近右岸の境内浸水状況(新地地区:24日10時頃)

出典：本明川における水害リスクと流域治水の事例について

[国土交通省 九州地方整備局 長崎河川国道事務所（R2.9）]

▼本明川水系既往洪水の概要

洪水発生年月		洪水被害の概要
寛永末年 (年代不詳)	1624年～ 1643年	本明川大洪水のため人家、耕地に被害。馬の鞍坂(天満町、円清田井原東側の丘)で手を洗うことができたと伝えられている。慶厳寺に溺死者のための供養碑がある。
元禄12年8月	1699年	本明川大洪水のため、溺死者487人。その他人家の流失、田畑の荒廃等の被害甚大。損失3,930石(この水害の供養のため、領主諫早茂晴が本明川の富川峡の巨岩に五百羅漢を作らせた。宝永6年(1709年)完成)
正徳元年	1711年	慶厳寺に溺死者供養塔があるが、詳細は不明。
文化7年6月	1810年	不意の大洪水で本明川唯一の石橋が流失。元禄12年の洪水と同じ程度と想定される。(この洪水を契機に眼鏡橋がつくられる。天保9年(1838年)に起工、天保10年に完成した。)
文化9年6月	1812年	大洪水により、市中の最高床上5尺5寸。流家、半倒壊多数。橋流失、堤防決壊、田畑水損等の被害甚大。
明治44年9月	1911年	豪雨により、諫早、大村で死者11名、行方不明者2名、家屋全・半壊52戸、破損275戸、流失16戸、床上浸水370戸、床下浸水253戸、その他堤防、道路、橋、田畑の被害多し。
大正3年8月	1914年	氾濫面積285町、負傷者3名、堤防決壊273ヶ所等の被害を受けた。
大正11年9月	1922年	豪雨(前線)により、諫早の雨量502mm(3日～9日)。被害の状況は不明。
昭和2年9月	1927年	暴風雨(台風)により、本明川が氾濫し諫早は泥海一大修羅場と化す。北高来郡の被害は死者16名、行方不明者1名、住家の全・半壊274戸、流失(一部流失も含む)66戸、住家浸水2,346戸等の被害を受ける。
昭和5年7月	1930年	暴風雨(台風)により、長崎県下で死者47名、行方不明者33名、諫早では、真崎、有喜、本野、小栗小学校の校舎倒壊(洪水:風水害年表)
昭和23年9月	1948年	豪雨(低気圧)により、本明川が氾濫。長崎県下の被害は、死者39名、行方不明79名、家屋の全・半壊99戸、流失64戸、家屋の浸水5,973戸等であった。
昭和24年8月	1949年	暴風雨(ジュディス台風)により、北諫早の雨量(15～17日)320mm。諫早市*の家屋浸水700戸、列車不通。また、海水浸水で農作物の被害甚大であった。
昭和27年7月	1952年	諫早市*で堤防決壊1箇所、家屋浸水118世帯、水稻冠水150町歩。
昭和27年9月	1952年	諫早市*で家屋全半壊3戸、床上浸水88戸、水田冠水146町歩、堤防決壊13箇所。
昭和28年6月	1953年	諫早市*で死者2名、床下浸水92戸、田畑冠水265町歩。
昭和28年7月	1953年	諫早市*で死者2名、家屋全壊2戸、床下浸水92戸、田畑冠水475町等の被害を受けた。
昭和29年6月	1954年	諫早市*で床上浸水2戸、床下浸水304戸、田畑冠水914町歩等の被害を受けた。
昭和30年4月	1955年	豪雨(前線)により、諫早市*で床上浸水24戸、床下浸水377戸、田畑の流失・埋没21.5町等の被害を受けた。
昭和31年8月	1956年	暴風雨(台風)により、諫早市*で死者4名、住家全壊86戸、半壊145戸、水田冠水120町等の被害を受けた。
昭和32年7月 (諫早大水害)	1957年	豪雨(梅雨)により、諫早市*で死者494名、行方不明者45名、負傷者1,476名、住家の全壊・流失727戸、半壊575戸、一部破損919戸、床上浸水2,734戸、床下浸水675戸、田畑の流失・埋没、崩壊805町等の甚大な被害を受けた。
昭和37年7月	1962年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で負傷者14名、家屋の全壊流失62戸、半壊25戸、床上浸水2,262戸、床下浸水8,058戸の被害を受けた。
昭和57年7月 (長崎大水害)	1982年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で死者3名、負傷者1名、家屋の全壊2戸、半壊11戸、床上浸水951戸、床下浸水1,457戸の被害を受けた。
平成11年7月	1999年	豪雨(梅雨)により、本明川流域で家屋の全壊1戸、半壊1戸、床上浸水240戸、床下浸水471戸の被害を受けた。
平成23年8月	2011年	豪雨(前線)により、本明川流域で家屋の床上浸水5戸、床下浸水24戸の被害を受けた。

注) このページの「市町名*」は、平成17年3月1日に行われた県央地区1市5町の合併前の名称にて整理しています。

出典：本明川水系河川整備計画(変更)(平成28年3月)

[国土交通省 九州地方整備局 長崎河川国道事務所]

長崎県長崎市位置図



出典：国土地理院

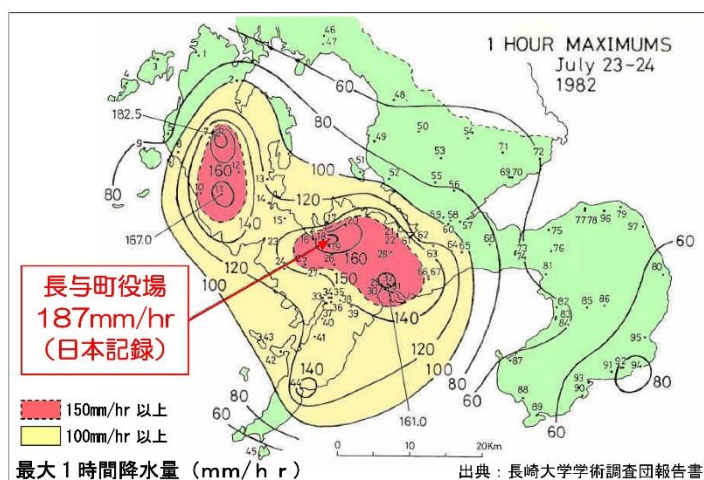
【長崎大水害（昭和 57 年 7 月豪雨と台風第 10 号）の概要】

- 1982 年(昭和 57 年) 7 月 23 日～25 日にかけて、長崎県南部を中心に記録的な豪雨となり、多数の死者・行方不明者を出した大災害「長崎大水害」が発生した。（全体では 7 月～8 月にかけて続いたとされる）
- 人的被害は、長崎県で死者 294 名、行方不明者 7 名、大分県で死者 7 名、宮崎県で死者 2 名となった。建物被害は、全壊 584 棟、半壊 954 棟、床上浸水 17,909 棟、床下浸水 19,197 棟、被害額は 3,150 億円に達した。当時の長崎県の当初予算が 4,097 億円であったことを考慮すると、その 77%に当たる資産が数時間のうちに失われたことになる。
- その他、崖崩れが長崎市で 583 箇所、長崎県で 4,457 箇所。地すべりが長崎市で 320 箇所、長崎県で 1,292 箇所発生した。

- 長崎市付近では 1 時間当たり 100 mm 前後の強い雨が 3 時間も降り続いた。西彼杵郡長与町では、7 月 23 日 19 時～20 時の 1 時間に 187mm の降水量を観測した。これは 1 時間降水量としては観測史上第一位の記録である。

- 長崎豪雨災害は、土砂災害と河川氾濫による災害の二面性を持ち、犠牲者の約 90%が土砂災害によるものだった。

- 7 月 23 日 20 時～21 時、河川氾濫によって市街地が冠水し、建物の地下室への浸水被害が生じた。長崎市内の各所で停電し、さらに、ガスパ折損によるガス漏れ事故も続発した。土砂崩れ等による死者は、この間に集中している。



▲最大 1 時間降水量図

出典：長崎県 HP



▲国道 34 号(芒塚付近)の大規模崩落の状況

崖崩れや土石流など土砂災害が発生した箇所は、長崎県内で 4,457 箇所にものぼった。

出典：長崎県 HP

提供：国土交通省長崎河川国道事務所



▲ 1 地区で 37 名の方が犠牲となった川平地区の土石流災害（浦上川水系）
出典：長崎県 HP



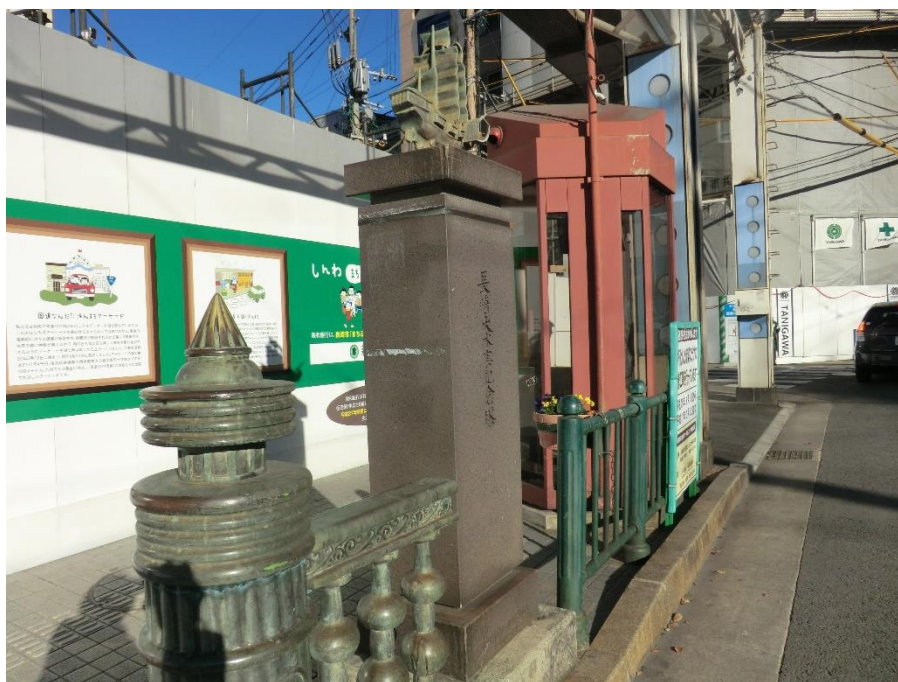
▲ 中島川の氾濫により一部流出した国指定重要文化財の眼鏡橋
出典：長崎県 HP

【長崎大水害記念塔：長崎市浜町】

- ・長崎市の繁華街である浜の町（思案橋電停付近）においても、長崎水害により、多大な浸水被害が生じた。河川氾濫により 2 メートル近く冠水し、逃げ遅れた人は電話ボックスやバス停の屋根に上ったり、電柱にへばりついて必死に難を逃れようとした。
- ・流され出した路線バスの屋根から決死の避難をしたケースもあり、突然の豪雨による出水で逃げ遅れた人は必死の対応を迫られた。
- ・被災から 2 年後の昭和 59 年 5 月、長崎中央ライオンズクラブは、浜の町アーケードと周辺地区の復興の精神をたたえる長崎大水害記念塔を建設した。記念塔には浜町の冠水水位が刻まれている。



▲長崎大水害記念塔の位置（長崎市浜町）



▲浜町の思案橋電停付近にある「長崎大水害記念塔」



■長崎大水害記念塔の碑文

「長崎の大水害は 過去 史誌によれば一六四七（正保四）年より数度にわたり 市民を苦しめた。この度のは一七九五（寛政七）年いらい 実に二世紀ちかくを経ての集中豪雨 異常な体験であった。

あの時 一九八二（昭和五七）年七月二三日 この思案橋跡の地点の水位は一、五七メートル。人も車もものすべてが奔流の底に消えていった。恐怖。打撃。しかし 被災市民はその昔もそうであったように 黙ってつよく立ち上がった。

誰をうらむこともない さあ復興だ と。

いま思案橋の街の灯は 更にあかるい。

この塔飾りには 長崎の港から未来に向かって大洋をこえようとする御朱印船を配した。大水害復興の心意気を讃えるためである。（木津義彰撰）」